

巻 頭 言

専門日本語教育研究の一方向（3）

外国語学習を0時間にする話

専門日本語教育研究会会長

大 坪 一 夫

(麗澤大学外国語学部)

創刊号、第2号まで、私は、「専門日本語研究の一方向(1)(2)」で言語の理解がどのようになされるかを知る必要性の重要性を主張した。理由は、日本語教育の関係者には、日本語の形式面への興味が強すぎるという個人的な感想があったからである。つまり、われわれの興味は、何を教えるかに過度に偏りがちだと言い換えてもいいかもしれない。やや大袈裟に言えば、そこにある種の危機を感じていたのかもしれない。何を教えるかの研究が無駄だと主張したつもりはないが、何を教えるか一辺倒では困る程度の主張はしたつもりである。

今号は、話題を大きく変える。

昨年の中ごろの日本経済新聞に「人間の記憶量を大きくするために、頭にチップを埋め込むことは可能だろう」と名前は忘れたがアメリカの人工知能の研究者が話していたという記事が出ていたのを覚えている。もし、これが本当の話ならば、日本語工学分野チップ、中国語チップ、英語チップ、韓国語チップを買い込んできて、ソケットに差し込めば、たちまちにして日本語で書かれた工学関係の文献がすらすら読めたり、中国語をペラペラと流暢に話しはじめたり、英語でまくしたてたり、韓国語で大演説をしたりすることができるようになるというわけである。これで、バベルの塔事件以来の、バラバラ言語状態が一举に解決することになるだろう。と、そこまで考えて、はたと気づいたのは、チップに何を書いておくべきなのだろうかということである。われわれは、それを知らないのだ。

上で述べたことを現実のものとするには、さすがの電気屋さんも少々の時間を必要とすることは間違いないだろう。が、電気屋さんが現実的に頭にチップを埋め込む装置を開発したときに、日本語屋さんが待ってましたとばかりに、そのチップに書き込むべき材料を提供できる状態になっていなければ、貴重なチップも宝の持ち腐れになってしまう。現在までも、LLもPCもマルチ・メディアも電気屋さんが開発した装置を、日本語屋さんが使いこなすのにいつも後追いを強いられてきた。たまには、日本語屋さんが、こ

んなことを書いたチップがあれば、人間は、0 時間で外国語を使いこなすことができるようになるのだが、この程度の容量を持つチップを作ってもらえないだろうか。中身は、提供するからと注文するようなことがあってもいいのではないだろうか。

そのためには、教育の現場を実験室にする必要がある。その実験室では、日本語屋さんが中心になって、心理学屋さんや医学屋さん等と協同して、外国語学習者を実験動物に(ちょっと言葉がきついか!!) 研究を進めていくという情景が想像される。

言語教育の分野では「脳内辞書」ということばが使われだした。「脳内辞書」とは、良い命名だとは思いますが、実際にはまだまだ初歩的な段階にとどまっており、実用化には程遠い状態であるようだ。私が見ている範囲では、たとえば、パソコンのディスプレイに単語に見えるが実は単語ではない文字の並びを見せたり、本当の単語を見せたりして、被験者に単語であるかないかを判断させたり、単語であると判断したらそれを音読させたりするような実験例があり、チップに何を書けばいいのかなどといえる段階からははるかに遠いところで研究が進められているようだ。これよりやや進んだ議論としては、「側頭葉には名詞を記憶し、側頭葉の上のほうには動詞を記憶する」また「側頭葉の後ろのほうには絵に関する長期記憶を保存している」のような記述も散見する。漢字は、ここに保存されているのかな。それとも、漢字は、絵ではないのだろうか。

もちろん真面目に調べさえすれば、人類が脳についてこの程度の知識しかもっていないと考える理由はなさそうだ。少し根をつめて文献研究をはじめれば、非常に多くのことが知られている可能性のほうが実は大きいと考えるべきだろう。

この研究を実現するためはかなり大掛かりな研究組織が必要になることは目に見えている。片手間で実用化が可能な研究だとは思えない。しかし、実用化した暁には、多くの費用をかけて成功者の少ない英語教育にも応用の道が開けるだろう。そのときの費用対効果の大きさを考えると、まんざら単なる夢物語に終わらせるには惜しい研究だといえるのではないだろうか。会員の皆様の奮起におおいに期待したい。

